

放送作家情報

2002/9/25

Vol. 18

発行/社団法人 日本放送作家協会

編集/広報・出版委員会

〒 106-0032 東京都港区六本木 6-2-5 ハラビル

03-3401-5996 FAX 03-3408-7411 E-mail to; info@hosakkyo.jp



放作協のホームページができました！ <http://www.hosakkyo.jp>

脚本家ニュースの紙面ではすでにお知らせしていますが、放送作家協会のホームページができました。インターネットをご利用の方は是非ご覧下さい。内容は約10日ごとに更新されています。協会の活動、各支部の活動、公募脚本の審査結果、会員の寄稿コラムなどで構成されています。

- 緊急提言！ 住基ネット稼働に抗議声明
- 緊急提言！ メディア規制法案に反対する共同アピール
- 第30回創作ラジオドラマ懸賞公募 受賞者の言葉
- 放作協の新しい執行部について
- シナリオ・番組制作講座のご案内～図書館や公民館などでの開催をお手伝いします～
- 第30回創作ラジオドラマ脚本懸賞公募審査結果！
- 第27回創作テレビドラマ脚本公募審査経過！
- 諫早図書館シナリオ講座 夏期制作実習セミナー開催報告
- 支部報告 ■北海道支部より「シナリオ実践教室～対談・月光の夏～」報告
 - 中部支部より活動報告
 - 関西支部最新情報
 - 中国支部 2002年の活動情報
 - 九州支部活動報告

特集 放送作家の”そこが知りたい！”(会員の寄稿コラム)

■私はこうして放送作家になった

■目指せ！放送作家 入門基礎講座

■放送作家のつぶやき

以上は2002/9/15現在の主なコンテンツです。本紙の裏面に抜粋記事が掲載されています。

ホームページは放作協の活動を広く社会に広める広報活動の一環であり、「放送作家」と呼ばれる我々の仕事の現況や、問題点、考えていること等々を、多くの人に知ってもらい、互いの意見や情報交換にも役立つサイトとして、大きく育てていきます。会員の皆様からの寄稿もお待ちしております。投稿はテキストファイルの形式でメールで送付いただくか、インターネットをご利用でない方でも、手書き原稿、フロッピーファイルなどで受け付けています。詳細は、メール、電話、FAXで事務局宛てに、お気軽にお問い合わせ下さい。なお、「私の告知板」という有料告知コーナーもあります。併せてご利用下さい。

放作協の事務局にてホームページが閲覧できます。閲覧ご希望の時はお立ち寄り下さい

放送作家情報は、サクサクっと **ライト版** で発行を続けます。

ホームページ開設に伴い、ホームページ委員会が新たに設けられました。また、脚本家年鑑の編集は2001年版まで協会の出版委員会で行っていましたが、既にお手元にお届けした「脚本家年鑑2002」より、編集は日本脚本家連盟が行っています。こうした新しい動きに伴い広報と出版が統合され、広報・出版委員会となりました。広報・出版委員会では従来通り、放送作家情報を発行して行きますが、当面はホームページと連動しながら、年4回（季刊）を目標に発行を続けていきます。

放送作家協会は、社会的活動の場を広げる文化団体です。

放作協は、公益事業を目的とする社団法人。それに相応しい社会的活動を目指し、協合理事会では、委員会活動を強化することで内部機構の刷新と社会的活動の場を広げていく試みを進めています。

◆全国展開をめざす「図書館シナリオ講座」

長崎の市立諫早図書館で協会員が講師として派遣された「オーディオドラマ講座」が大好評。各自治体の公共図書館から、問い合わせもあり、今後、放作協の企画事業としてさらなる展開を目指します。

◆ドラマ脚本公募事業

放作協主催のドラマ脚本公募事業は、「創作ラジオドラマ懸賞公募」（放送文化基金助成、NHK後援）が間もなく第31回の公募を開始し、「創作テレビドラマ懸賞公募」（NEP21と共催、放送文化基金助成、NHK後援）は現在第27回の審査中です。審査には多くの協会員にご協力いただいています。公募と平行して開催される公開講座も定員を超える申し込みがあり、参加者に大変好評を博しています。今後は新聞社、出版社など多メディアとの連携も視野に入れ、「放送作家の登竜門」としての公募事業を一層充実させていく所存です。

◆放送文化への貢献

ラジオドラマの活性化を目指し、在京キー局の制作担当者と放送作家が情報交換・研修などの活動を続けている「ラジオの会」は独立した親睦団体となっていますが、事務連絡の窓口として放作協が後援しています。また放送作家の台本など貴重な資料を収蔵する横浜放送ライブラリーへの協力も積極的に行っていく予定です。さらに今後は「メディア・リテラシー」にも取り組んでいくために、準備を進めています。

◆もの申す団体

「放送を考える委員会」が窓口となって、「メディア規制法案に反対する」声明をシナリオ作家協会と共同で、また「住基ネット稼動に抗議し即時凍結を強く訴える」声明を協会単独で国会議員、マスコミ各社に送付しました。

◆講師派遣事業の展望

さまざまな団体が主催する講演、文章作法教室などに放作協から講師を派遣する事業は、すでに会員の皆様から寄せられたアンケートに基づいて、少しずつではありますが稼動しています。さらにホームページやデータベースの整備で事業の拡大・充実をはかるため、作業を進めています。

◆支部との連携、会員相互の情報・意見交換

ホームページを活用し、支部との連携、全国の会員相互のコミュニケーションの一層の

活発化をはかります。

放作協のホームページから抜粋

諫早図書館シナリオ講座(4) 夏期制作実習セミナー開催！ 日本放送作家協会 理事 竹内日出男

昨年未から長崎県の諫早市立図書館で連続的に開かれてきた『シナリオ講座』も、今夏で4回目。これまでは図書館という場にふさわしいオーディオドラマ（ラジオドラマ）の魅力と脚本作法について、日本放送作家協会に所属する脚本家たちが講義を重ねてきましたが、いよいよ今回は新しい段階に突入！ 去る8月6日から3日間の日程で、音響効果のベテランで当協会員でもある大和定次と脚本家・竹内日出男とが諫早へ出かけ、多くの市民や高校生の皆さんにドラマの制作過程を実地に体験していただきました。もちろん『シナリオ講座』である以上、実習用脚本も受講者の方から募集するのが本筋というもの。図書館側の熱心な呼びかけによって予想を超える9編の応募があり、そのなかから諫早市在住の公務員・山本博幸さんが書かれた『楠の下で』を選び、竹内が少々手を加えてテキストとしました。煙草を吸って先生に悪しざまにののしられ、カッとして「死んでやる！」と思いつめた高校生が、諫早公園内の小山に立つ大楠の樹下で急な陣痛に苦しむ若い妊婦に出会い、彼女を助けるうちに胎児の父親かとまわりに誤解され、とうとうその出産に立ち会わされて命の尊さを実感する——そんなストーリーのコミディタッチの短編ドラマです。図書館の視聴覚ホールのなかに仮説スタジオをつくり、出演者も全員地元の方々。それでも、リハーサル、台詞収録、効果音づくり、完成品の作成にいたるまで、大和と竹内の指導のもと、高校生中心の受講者たちが熱心に参画していただきました。地元FM諫早スタッフの全面的な協力も感謝いたします。

それにしても、限られた設備と時間の制約のなかで無経験に等しいメンバーが1編のドラマを仕上げようというのですから、これは大変なことです。しかし、熱意さえあれば困難は克服できるもの。試行錯誤のすえに17分の面白い作品が仕上がったときの満足感は、何物にも替えがたいものがありました。直接作業に参加せずに見学していた受講者の方々にも、得るものが多かったと喜んでいただけました。この経験をもとに、受講者のなかから全国レベルの優れた脚本が生まれる可能性もありますし、高校放送部の活動などにも弾みがつくかもしれません。オーディオドラマを地域文化振興の起爆剤としたいという図書館の方々の期待に、ぜひ応えていただきたいものです。仕上がった作品は、後日、FM諫早で放送される予定です。なお、この講座、9月末にはドキュメンタリー番組制作を取り上げます。全国各地でも、こんな動きが広がればいいのですが……。

お問い合わせは日本放送作家協会、または諫早図書館（Tel：0957-23-4946）まで

「シナリオ実践教室～対談・月光の夏～」報告

北海道支部・事務局長・合田一道

映画「月光の夏」の札幌上映を機に、主催の青踏合代表海原卓さん、原作・脚本を書いた放送作家の毛利恒之さんが来札されるというので、日本放送作家協会北海道支部は全面的に協力することになった。北海道支部は5年前から、道新文化センターで「シナリオ実践教室」を開いている。受講生は基礎科と研修科を合わせて18人。そこで映画を鑑賞してから毛利さんを招いて特別講座「対談・月光の夏～フィクションとノンフィクションの狭間で～」を開く計画を立てた。対談の相手は私、合田一道。道新文化センターと話し合い、受講生だけでなく、一般にも公開する形を取った。受講料500円。参会者には8月11日昼夜2回上映される映画を見てもらい、翌12日午後6時30分から道新文化センターで特別講座を開いた。参会者はざっと70人。会場に熱気が渦巻いた。毛利さんは「月光の夏」の制作のきっかけとなった古いピアノの話から説きだし、ラジオのドキュメント作品から映画制作へ動いていった経緯に触れ、原作『月光の夏』を執筆する取材の中で「特攻寮」の存在を知り、これを挿入することで、戦争の持つ非人間性を照射する方法を取ったと説明、「事実と事実を練り合わせて作り上げた作品であり、それにより、より真実に迫ることができたのではないかと述べた。会場には映画の主人公と同じ元特攻隊員・陸軍特別操縦見習い士官1期生もいて、毛利さんの話にじっと耳を傾けていた。後段は私が戦時中に起こった食人事件を扱ったノンフィクション作品『裂けた岬』と満蒙開拓団の最期を書いた『検証・満州1945年夏』の取材、執筆経過を述べ、「真実の追究がいかに難しいものであるか」を述べた。対談の後、懇親会が開かれたが、毛利さんは受講生の質問攻めにあいながら、楽しく「シナリオ談義」に花を咲かせていた。時間は大いに食い込み、月光の夏燃える……といった感じの札幌の一夜だった。

「シナリオ実践教室」に関するお問い合わせは道新文化センター（電話011-614-3945）へ

特集！私はこうして放送作家になった

放送作家になるにはいろいろな方法があります。人それぞれ、十人十色です。そこでコラム欄ではおよそ1000人いる当協会の会員が、どういうきっかけで放送作家になっていったかを特集しています。投稿していただきますと順次掲載いたします。例えばこんなコラムです。

●岡部優子の場合

デビューして3年が過ぎ、1人で書きたいことを書いていた頃と違って、仕事でシナリオを書くということは、多くの人のさまざまな意見を集約する作業であり、みんなで1つのものを作る中に参加することなのだ、いい意味であきらめようとしていた。それは、落ち込んだり、がっかりしたり、怒ったり、不安になったりしないで、前向きに仕事に取り組んでいくためだった。

が、先日、「ドラマ」3月号の山田太一氏のインタビューを拝読して、ハッと立ち止まらされた。

「…テレビドラマは確かに共同作業ですが、どこかで個人的なものに触れてないような作品はダメです。…」

今、「ちびまる子ちゃん」(フジテレビ)、4月スタートのアニメ新番組「あたしんち」(テレビ朝日)などに取り組んでいる。打ち合わせで出された意見をどのようにしてシナリオを書く時にうまく生かしていくか、どの程度自分の意見を押しつらいつけるか、1本1本、ジタバタしながら書いている。

自信過剰や、独りよがりや、自己主張が強すぎることは好きじゃなくて、もう少し職人的というか冷静でいたいと思うのだが、でも、十代から大学生くらいの頃は、“書かなければ生きていけない”というくらい思いつめて書いていたなあ、と、あの頃の気持ちを、久しぶりにふと、ちょっとだけ思い出した。(いっぱい思い出すと恥ずかしい。)

*現在、高桐唯詩、香取俊介、井上美保子、田中格、石垣賢蔵、金子正道、三原治、保井明、渡辺麻実の各会員(敬称略)からの寄稿が掲載されています。

放作協ではさまざまな委員会活動が行われています。現在は規約委員会、財務委員会、企画事業委員会、広報・出版委員会、放送を考える委員会、公募事業委員会、ホームページ委員会の七つの委員会が機能しています。協会の活動は会員であればどなたでも参加できます。また委員会からご協力をお願いすることもあります。会員の皆様に協会のさまざまな活動をご理解いただき、皆様の文化活動の拠点としても役立つよう、今後とも皆様の協力を得て、発展して行きたい。それが、今日の放作協です。

編集後記

約1年ぶりの放送作家情報の発行です。今期から紙面は表裏1枚に印刷されて、軽くあっさりとした、幾分執行部からの事業報告めいた内容になってしまいました。これまでの放送作家情報の充実度からすると、いろいろなご意見・ご感想もあると思われます。時代の流れに沿って、放作協の広報活動も今後はホームページが主流になっていきます。とはいえ、紙媒体や肉声による広報活動もおざなりにはできません。当面は簡略化した形での再スタートですが、広報・出版委員会に統合されたことで、ホームページのサイトでは創ることのできない紙媒体ならではの放送文化を読み物としての形にしていく活動を目指していきます。ご協力・ご理解の程、よろしくお願いいたします。

広報・出版委員長 奥山侑伸

今号編集担当 さらだたまこ

企画・編集／広報・出版委員会(五十音順)

井上美保子、奥山侑伸、さらだたまこ、花輪如一、福岡秀広、藤森いずみ